

大通公園を望む窓辺から

病院を退職して

副会長 小熊 豊

平成30年3月31日で27年あまり勤務してきた砂川市立病院を退職し、名誉院長になった。平成8年に院長となり、平成26年に事業管理者に就任、足掛け22年間の病院責任者を何とか終えることができた。良くも悪くも様々なことがあったが、何とか過疎地の拠点病院を無事後任者に引き渡すことができ、ホッとしている。最近首～肩の凝りをほとんど感じなくなり、何か体が軽くなった気がするし、イライラする感情も少なくなったように思う。退職とはいいいもので、「退職おめでとう」と言われる意味が実感できる。

運送業者の都合で4月4日に砂川の医師住宅を引き払い、札幌の自宅へ戻った。家内に言わせると、やっと自分の家で暮らせるようになった気がするようで、炊事、洗濯、掃除…等々全くしない私のために、常に一緒に居ざるを得なかった妻の第一声であった。砂川の家には多くの物を置いてきて、病院に処分してもらったことになった。家内の嫁入り箆笥から、書棚、テーブル、TV、洗濯機、ゴルフ道具等々、それに私が作ったジグソーパズルの作品などである。引っ越し業者さんには「独り者より荷物がない」と言われ、病院関係者には「使いたいという人がいたらあげていいですか」などと聞かれたが、いずれも古かったり半分ガタがきており、どうなったのかは聞かないことにしている。以前から趣味の一つであったジグソーパズルは、新病院の廊下にすでに相当数掛けさせてもらっているが、また掛けてくれそうで喜んでいる。趣味と言えばもう一つ、木製建築模型の平等院鳳凰堂を部屋に飾っていたが、新たに事業管理者となった平林Dr.に「何か変なものが置いてある、捨てよう」と言われ、私が作ったので是非記念に置いて欲しいとお願いした。3個目の平等院鳳凰堂で、やっとまともにできたものであった。平林事業管理者は呆れた顔で、慌てて小熊名誉院長作と制作者名を張り、書棚の中に半ば不満そうに飾ってくれた。ジグソーパズルにしろ、木製建築模型にしろ、院長、事業管理者って案外暇なんだな～と、以前から制作者を知る職員に言われていたものである。私の汗が混じった物が心血を注いだ病院に飾られ、嬉しい限りである。



地域包括ケアシステム雑感 —住食医・身近な世代で相互扶助—

理事 山下 裕久

愚痴のようだが書いてみる。「地域包括ケアシステムの相談窓口を医師会事務局に」と市から申し入れがあった。医療と訪問看護の相談は可能だが、介護関連の情報は不十分で、さまざまな問い合わせに対応できないとお断りした。

「包括ケア」は医師会の仕事と短絡思考したのか？ 医介連携は必要だが、介護は生活支援で行政が主となって動かしている。ふと、古の“衣食住”を思い出した。映画「三丁目の夕日」では、貧しくとも温かく隣人と交流する情景が描かれている。

子供たちが家を離れ、高齢所帯に独居が広がっている今はどうだろう。疾病の有無に関わらず、どこでどのような家庭環境と周囲のサポートの下でといった住処の状況、食品を入手し、バランスの良い食事に栄養状態と体力の維持、そのような基盤があって医療が支える、“住食医”が「包括ケア」のキーワードと思い至った所以である。

“住食”関連は行政の役割が大と思う。施策が創られたとして、さて誰がそれを支え行うのか？

6月2日の報道に「昨年（2017年）の出生数最少94.6万人」とあった。日本の年齢別人口は2013（平成25）年10月国勢調査で、64歳の223万人が最多、第二次ベビーブームの40歳202万人までなんとか維持されているが、その後は急減し、9歳以下は110万人以下とある。

調査5年後、平成30年初頭の我が街・旭川の人口は70歳が約6千人、30歳が約3千人、0歳は約2千人とあった。半減と1/3である。市の審議会が介護関連委員が「職員の充足に若年層の就業促進」と発言したが、無い物ねだりに等しい。

介護ロボットか、外国人か、年齢の近い世代が介護に参加し相互扶助をするのか。

間もなく4人目の孫が生まれる。彼らに負担はかけたくない。そのためにはどうあればと、老翁心で考える。